

研究所だより

相良 孝雄

2016年度の折り返しを迎え、7月1日開催予定の協同総研総会に向けて、研究所として何を行ってきたか、そしてその意味することは何であったのかを振り返り、総会までにどのような研究活動を行っていくのかを展望する時期に来ています。

今年度、総会で確認した第4号議案に沿い、研究活動を行ってきました。「地域づくりと人間としての生き方をつなぐ“協同労働”を解明し続ける」をテーマに、以下の4つの方針を掲げました。

- 方針① 地域コミュニティの社会的組織としての協同組合の研究
- 方針② 住民が「協同労働」をつくる時代。「協同労働」の社会的価値を研究、発信する
- 方針③ 拓かれた研究所として、社会問題から「協同」の価値を、多くの方と主体的で自由な議論によって深め合う、「研究・交流・学習」のプラットフォームづくり
- 方針④ 研究所の組織課題
 - (1) 研究誌の出口戦略と特集戦略をたてる。
 - (2) 会員拡大方針
 - (3) 協同総合研究所5原則の再定義を討議
 - (4) 協同総合研究所25周年記念事業の開催

紙幅の関係で、方針の具体的な行動提起までは転記することはできませんが、とりわけ方針で掲げたもののうち、今年度の研究活動を象徴する大きな出来事として、「25周年記念事業(12/3集会、12月号、3月号の記念冊子)」と「寄附講座等の『ワーカーズコープ論』の展開」があげられる。

25周年記念事業は、「12月号(289号)論考編」とともに、「3月号(292号)資料編」を作成予定ですので、詳細はそちらに委ねたいと思いますが、この25年で多くの先人たちの知恵、努力、蓄積があり、25周年も迎えられたと考えています。25年を振り返るなかで「1993年の労協連初のヘルパー講座の開講し、来たるべき福祉社会の未来を予想し、その担い手を育成する先見性があったこと」「研究誌を通じて協同労働や協同組合の社会的発信をしたこと」「海外の労働者協同組合運動等から学びながら、それを日本で紹介してきたこと」「研究者や実践者のネットワーク化を労協連グループとして一翼を担ったこと」「研究者と実践者が融合する場所をつくり続けていること」などが25年間で培った成果であり、今日まで来ているのではないかと考えています。協同の発見誌12月号(289号)の巻頭言にも書きましたが、この25年を一言でいえば、「協同」に関わる本質や真相に迫る論考を出し、ときには行動に移しながら、「協同」を問いつづけた25年であったと感じています。

寄附講座をはじめとした「ワーカーズ

コープ論」は、特に若い人を焦点にワーカーズコープの実践と社会的役割について、講義や現場へ足を運び、学生自らが学びを深める場になっています。講座終了後に、卒業論文やゼミ活動で「協同労働」について考えるテーマが増えてきています。具体的には、沖縄国際大学寄附講座後、ワーカーズコープの話を中心にして野村総研で「社会的コミュニティ再生へ向けて 従来の労働観からの脱出！」をテーマに奨励賞を受賞した「藤山夏海」さん。卒業論文で新潟大学の渡邊登ゼミの学生が「協同労働が成立するための諸要因」をテーマに作成。福山市立大学の前山総一郎ゼミの学生も協同労働を切り口に就労支援に関わる卒論を記載。また、立教大学の小倉ゼミ「自分のためは、誰かのために～協同から見えた生きやすさ」や駒沢大学松本ゼミ「大学生から見た協同組合の可能性」(ともに協同の発見誌285号に掲載)などもありました。「協同労働の働き方」が若い人に注目され始めているとともに、若者がワーカーズコープや協同労働の働き方に出会う場づくりを推進し、ワーカーズコープの関連組織とも連携し、「学生の学び」を焦点にしながら、「学生自身が地域課題から仕事をおこす『学生(スチューデント)ワーカーズコープ』づくり」をはじめ、協同労働や協同組合と大学がどのように結びつくのかの戦略を描けるところまで来ています。ちなみにこのような流れは労協連、協同総研で培ってきた歴史の蓄積や研究者の会員との信頼関係やネットワークをつくってきたことが土台と

なって実現できていることはいうまでもありません。

2016年に掲げた4つの方針で、まだできていないこともあります。例えば「法制後、ワーカーズコープにとって問われる研究テーマの抽出とその深化(協同労働の地域化・社会化・法制化時代の中で問われる課題や住民が協同労働で組織や事業を立ち上げるときの課題と展望等)。「研究所が自立した財源・体制でどのように研究体制を組むのか」。「25年が経過しましたが、『協同総研五原則』(1、人類的(国際的)見地の原則 2、変革の立場の原則 3、人間発達重視の原則 4、実践と研究の結合の原則 5、自立の原則)の振り返りを通じて、五原則の現代的な意味や価値の再検討」などがあります。また25周年記念集会を開催した際に、「協同組合の源流を問う」「協同労働という働き方」「よい仕事と社会連帯経営」の3テーマを掲げましたが、これを進化させるために現在、「共同体と協同労働」「社会運動(協同組合の社会的役割)」「持続可能な社会と協同組合」の3本のテーマを今後、研究所として推進し、しっかり深めることが大切だと考えています。

研究のための研究ではなく、現実を変える実践と研究をつなげるプラットフォームとして、もっとダイナミックに研究活動を推進し、ネットワークをつくっていくことを7月1日総会までに行っていきたいと思っています。引き続き、会員の皆さんと「協同」してがんばりあいしたいと思います。宜しくお願い致します。